

## [吉祥の美—幸福への願い—展によせて]

## サルに付された吉祥の意味

中国における吉祥の図案は数限り無くありますが、その由来としては次のような造りが挙げられます。蝙蝠(蝠と「福」fu:ピンイン表記、以下同じ)のように言葉の音が同じであるもの、如意のように名称の意味をその形であらわすもの(如意=思い通りになるの意味)、そのものの習性から意味付けられるもの(魚=子孫繁栄、また、「余」yuとの音通から裕福になるという意味も持つ)、桃(=長寿)のように神話や伝説などが背景にあるものなどがあり、さらに、これらのモチーフの組み合わせによっても平安如意や年々富貴など様々な吉祥の意味が生じます。あらゆるものに良い意味を見いだそうとし、また、語呂合わせのような手法には、幸福を求める強い気持ちとともに、豊かな遊び心が感じられます。

清水裂(図1) 中国・明時代、大和文華館蔵)には梅樹に鶴が飛来し、樹上では蜂の巣をつつこうとしているサルの姿が見られます。画面下方には靈芝をくわえた鹿と竹の生えた奇岩があり、画面全体が榮達や長寿の吉祥図像で構成され、鮮やかな藍色の地に多彩に色分けして織り出されています。本稿では、特にサルのモチーフに焦点を当てて吉祥の意味を見ていきます。

中国において、サルは猿(手長猿)と猴(日本ザルのようにしっぽの短いサル)に大別され、『西遊記』の孫悟空などは後者の種類と見られているようです(中野美代子『孫悟空の誕生 サルの民話学と「西遊記」』1980年、玉川大学出版部)。吉祥文様でサルが描かれる際に猿と猴の図像が混同される例もありますが、「猴」の字が「侯」houと同音であるために侯に封ぜられる榮達を示す意味が付され、吉祥文様では多くが「猴」のサルが用いられています。

サルの描かれる吉祥画題と意味、描かれるモチーフを次に挙げます。

- 《爵禄封侯(封侯挂印)》侯に封ぜられ爵禄を得る(官印を持つ)／鵲que(「爵」jueとの音通、吉報を告げる鳥)、鹿(「禄」luと同音)、蜂または楓(「封」fengと同音)、猴(「侯」houと同音)
- 《馬上封侯》すぐに(馬上の意味)侯に封ぜられる／馬の上に猴が乗る
- 《輩々封侯》代々侯に封ぜられる／親猴が子猴を背負う。背(「輩」beiと同音)

(図1)



- 《百禄封侯》長寿と榮達／柏(「百」baiと同音)、鹿、猴

清水裂の内容は《爵禄封侯》であり、猴のサルとしてあらわされています。また、魚化龍堆朱盒子(図2 元時代、東京国立博物館蔵)の蓋上には、鯉が飛び上がって龍に変化する様子(立身出世)を傍らの人物に指し示す猴の姿が見られます。ここでは猴は立身出世、榮達をあらわす寓意として用いられていると見られます。

ここで赤絵仙姑文壺(図3 磁州窯、元時代、大和文華館蔵)を見てみると、胴部が華弁形に四区分され、そのうち三面に人物を伴う場面が、一面に蓮池図が描かれています。三面は屋内に坐す女性に男性が碗を捧げ持つ図を中央に置きます。両隣に配された場面は似通い、山中を裸足で歩く女性が中央に描かれ、女性は葉で作られたような衣を身に着け、籠と鎚を手にしています。片方の図には片手で枝葉を担ぎ、もう片方の手で中央の女性に桃を差し出す猴が描かれています。桃は通常、西王母の三千年に一度実をつけ、食べると不老不死となる伝説にまつわり、長寿の意味合いを持ちます。対の画面では猴の代わりに鶴を伴っており、これらの常人とはやや異なる人物表現と靈芝の生えた山奥の状況から女性は仙女と考えられ、また、間の区画内に描かれた女性は西王母とも捉えられています(澤田和人「大

(図2)



(図3)



和文華館所蔵「赤絵仙姑文壺」をめぐる諸問題』『大和文華』102、1999年)。本図では猴は仙女に付随するモチーフであり、長寿の寓意の一つとして描かれています。描線は柔らかく手慣れており、釉下の鉄釉に赤と緑の上絵付けによる彩色を加えた明るい画面となっています。仙女の顔貌もふくよかで、民衆ならではの大らかさに溢れています。

猴と桃の関わりでは、良く知られているように、明代に集大成された『西遊記』の中にも逸話が見られます。その中で三蔵法師のお供をして取経の旅をする以前の話として、孫悟空は西王母の管理する不老長生の桃を勝手に食べて捕まえられ、八卦炉に投げ込まれる姿で描かれています。大衆文学である『西遊記』からも、西王母と不老長生の桃の話が連綿と浸透していたことがよくわかります。

吉祥の図案は、人々の持つ幸福への直接的な願いを自然の景物や事象などに託してあらわしたのですが、そこには表現の面白さへの工夫や音のつながりによって意味付けをするなどの娯楽性が感じ取れます。文様に意味を付す際に、絵解きや言葉遊びとして吉祥文様を楽しんだ様子がかいま見られるのではないのでしょうか。(図2は『吉祥—中国美術にこめられた意味』東京国立博物館 1998年より複写させていただきました。瀧朝子)